福山市立大学 教育学部研究紀要 2014, vol.2, pp.111-116

音を伝え合い自己表現力を育てる子どもの音楽活動についての考察

村山　ひろみ [1]

A study of musical activities to promote mutual communication through sounds and to foster self-expression ability

MURAYAMA Hiromi [1]

Music functions as most powerful self-expression in children. Self-expression in music activity is based on interactions between partners in a group and individually different intentions to use acquired musical skills.

Psychological factors, including self-affirmation in groups, trial and error in expression of musical content, accomplishment and resulting satisfactory, are likely to generate a pleasure of musical performances, which in turn would develop the ability to express oneself in music.

Keywords : Self-expression, Communication on sound, Explore

1　はじめに

就学前の教育・保育の場において，入園・入所してきたばかりの子どもたちは，環境が変わる，見知らぬ人がいるなどの不安を「泣く」という行動で表現している。その場に携わる保育者達は，子どもたちの「泣く」という行動を，その子の成長の一つのバロメータとしてみることがある。４月の幼稚園で，今年の３歳児はあまり泣かないですよというようなやりとりは，幼稚園という今までとは異なる環境に比較的早く対応していってくれるだろうという期待感と，それだけ子どもたちは成長しているという安心感の表れでもあった。しかし，泣くことも少ないが，保育者の問いかけに対する反応も少ない子どもたちがみられてきたことに少なからず危惧を感じている。

自身の感情や思いを表現し，それを相手が受け止め何らかの反応を返してくれてコミュニケーションが始まる。言葉を表現手段として使用できる前段階に，表情，視線，動作などの非言語による表出が必要である。反応の少ない子どもたちの思いを計り知ることには難しさがあると同時に，人との関わりにも自身の思いを人に伝えにくくなるだろう。ことばを使って思いを表現する以前に，ノンバーバルな表現方法を獲得して自身の感情や思いを表現してほしい。

それを可能にしてくれる方法の一つに音楽がある。子どもたちにとっての音楽活動は，歌ったり，楽器を演奏したりという，自らが表現にかかわる活動である。子どもたちは，音楽を媒介として何らかの自己表現をしており，子どもたちにとっては，音楽は容易な自己表現手段となりうる。

2　自己表現すること

子どもたちの年齢が低くなればなるほど，子どもたちの感情の変化は身体の動きとなって表れてくる。テレビから流れてくる音楽に合わせ身体を揺らしている子どもたちの中では何らかの変化が起きている。それは，誰に何かを伝えたいという目的をもった表現とは言えないが，彼らは内面でおきている変化を表出しようとしており，それは自己表現の始まりであるといえる。

子どもたちは成長の過程でさまざまなコミュニケーションの手段を獲得していく。最初はノンバーバルな手段を，

[1] 福山市立大学教育学部児童教育学科

次にことばという表現手段を獲得していく。自己の思いや要求を表現するのは，基本的な生存欲求を満たすことにはじまり，人との意思疎通を図りより快適な社会的な環境の中で生活することを目的としている。

人間のさまざまな欲求は，一人では満たすことができない。年齢が低くなればなるほど，それは他人に依存している。眠い，食べたい，暑い・寒いという身体的・生理的な欲求は，それを実現してくれる人に対して発している表出である。その欲求が満たされたとき，子どもたちは自身が表出した内容に対する他者からの反応を感じ取っている。

ただ，その欲求の満たされ方によっては，他者への発信の必要性を感じなくなる場合もあるだろう。他者へ発信した欲求が全て実現する，場合によっては欲求を発信しなくても実現することがある。靴はいつも履かせてもらえるものであるなら，靴を履くという欲求を表明する必要もないし，欲求そのものを感じる必要もなくなるだろう。そのとき，感情や思いを持つ必要もなくなるということになる。欲求を表さなくてよいということは，欲求を実現してくれる人に何かを伝える必要がないことであり，それによりその関係も希薄になってくる。

何らかの内的な変化が起きてはじめて表出や表現が生まれてくる。言語によるコミュニケーション力が不足している子どもにとって，音楽は彼らに内的変化を引き起こしてくれるものであり，その内的変化を彼らは身体を使って表現している。それに対して，周囲の大人は笑顔で返したり，手を取って動かしたりして，いっしょに彼らの表出や表現を受け止めてくれる。子どもと大人との双方向の表出や表現でコミュニケーションをとっているといえる。

自己表現を成立させるにも同様に双方向の情報発信が必要である（図１）。自己表現する人に対し，それを受け止めてくれる人，聴いてくれる人がいて，そこからの何らかの反応があって自己表現は成り立つ。相手からの反応や発信を期待しない自己表現も存在するだろう。神や自然に対する畏敬の念を表明する表現はその類であろう。しかし，日常の生活の中では一方的な情報発信では自己表現は成立しない。人の前に立ち，歌を歌ったり，演奏したりする場合も，それを聞いている人からの反応を演奏者は受け止めることができる。しかし，演奏会や発表会などのような形式をとる表現だけを自己表現とするのは，非常に狭義の捉えとなる。

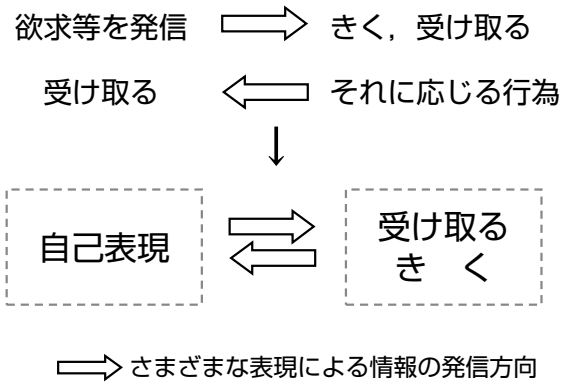


図１　自己表現の成立

幼児の中には音楽に合わせた身体表現を全く行わない子どもたちがいる。音楽がなり，先生や友だちは楽しそうに音楽に合わせて身体表現しているが，その場に立ったまま何もしないでいる。その表情には，やりたくないという拒絶，友だちのようにできないという羞恥心や劣等感などが一切見えず，その内面にはそれぞれの感情や思いがあるのだろうが，ただ無表情に立ちつくしている。それを単に自己表現が苦手であると解釈してよいのだろうか。

そんな子どもたちも，２人で遊ぶわらべうたや手遊びには参加でき，自己表現をしている。表現する相手がいること，その相手が楽しそうな表情を見せていることにより，明確な意識として自覚していないであろうが，自己が受け入れられていると感じ，いっしょに楽しもうとしていると考えている。向かい合い，音楽に合わせて同じ動作をしながら，友だちといっしょの時間を過ごし，楽しさを共有している。自身の表現と同じ表現をすることでその遊びが成立しており，自身の表現を受け止め，それに対する反応を返してくれていることを感じている。ノンバーバルな方法による双方向の情報発信が行われているといえる。

３　音を伝え合う

音を伝え合う活動の一つにボディパーカッションがある。ボディパーカッションは，相手の動作に注目し，叩いているリズムパターンを聞き，たたく場所を覚えてまねることから始まる。ボディパーカッションの「まねっこリズム」活動は，人のやることをよく見ることを大前提としている。身体の部位をたたいてリズムパターンを出す相手に集中し，それをまねしながら自己表現し，相手との対話をしている活動といえる。相手に集中し，リズムパターンやたたく場所をまねる行為で相手を受け入れ，それを相手にかえす音の伝え合いである。

また，さまざまなドラムやパーカッションを使い，参加者は文字どおり輪（サークル）になって即興的に音楽を楽しむ音楽活動であるドラムサークルも，ドラムやリズム楽

表１　ドラムサークルとボディパーカッションの特徴

音楽活動	長　所	特　徴
「ドラムサークル」（Arthur Hull,2004）	①楽しい，②自己表現できる，③ストレス解消，④心や身体のエクササイズ，⑤社会的交流，コミュニティーの構築，⑥仲間意識と相互支援，⑦世代を超えて誰でもできる活動，⑧リズムに乗り，即興やアンサンブルをするという基本的な音楽能力の向上	①言葉を使わないコミュニケーション②それぞれのやり方で参加できる③不正解はない ※人の出す音をよく聴く
「ボディパーカッション」（山田俊之，2003）	①簡単で楽しい，②自己表現できる，③誰でも（耳の不自由な人も）参加できる，④集中力を育てる，⑤誰でも遊びをリードすることができる，⑥世代を超えて誰でもでき活動，⑦リズムに乗りアンサンブルをするという基本的な音楽能力の向上	①言葉を使わないコミュニケーション②誰でも参加できる ③不正解も楽しい ※リードする人に集中する

器の演奏をとおして自己表現したり，他者とコミュニケーションしたり，共感したりすることを目的としている。

ボディパーカッションやドラムサークルにおける実践は，個人としては自己表現の楽しさを，集団としてはコミュニケーション力や協同体への帰属感を獲得できる（表１）。これらの活動では，相手が自らの表現を真剣にとらえて返したくれたという良好な関係が存在しており，互いの存在を認めながら，それぞれが自己表現しているのである。

ドラムサークルやボディパーカッションにおけるさまざまなリズムを叩くという音楽表現は，特別に訓練された音楽的能力を必要とはしていないため，誰でも達成できるという利点をもつ。これらの活動では，人が出している音をよく聴き，そのリズムのもつ拍節感を体得しながら音による対話という音楽表現ができる。子どもたちにとっては，音を媒介として人とかかわることができるという過程をとおして，表現できたという達成感や満足感から表現する楽しさを感じ取り次の表現への意欲を得ながら他者と音楽する喜びとともに，自身の音楽表現する能力を獲得することができる。

数人が輪になり，１拍目は手拍子，２拍目に隣の人の手のひらをたたき，音とリズム，テンポをリレーする活動で，さまざまなテンポや強弱で表す拍を感じ取ることができる。この活動では，音の長短を空間の広さと関連させ，短い音は狭い空間で，長い音は広い空間で実践することで，正しく拍を感じながら表現する活動が容易にできる。一定の間隔で規則的に打ち出される拍を感じとることは，音楽にとっては最も基本的な獲得すべき能力の一つである。一定の速さでいろいろな音の長さの組み合わせが規則的に繰り返されてリズムが生じ，それに音の高低が組み合わされてメロディが生まれ音楽になるからである。

１拍目は手拍子，２拍目に隣の人の手のひらをたたき，拍をリレーして伝えていくこの活動に注目する大きな理由がある。拍をリレーして伝えていくという単純な実践ではあるが，次の人に伝えられた拍は，また次の人へと伝えられていく。メンバーの１人の表現を，次のメンバーが確実に受け継いでいく。誰もその行動を拒否することなく行動が継続することで，それぞれのメンバーがそのグループの中の存在を承認されたことになり，一人ひとりがそのグループへの帰属感，所属感を感じっていることになる。拍を次に伝えるという自己表現を，次の人がその次に伝えるという表現で，最初のメンバーの自己表現に応答したことになり，それをメンバー全員で行うことで，そのグループ全員に同じ体験が可能になる。

そのとき，伝える人，受け取る人がいっしょの時間を過ごしていることになり，内的な時間を他者と共有している。コミュニケーションは，ことばあるいは他のさまざまな手段による人間相互の交流と理解のプロセスである。そこには，発信者と受取手との間に交わされる伝達のプロセスが含まれる。拍を伝える実践は，その意味で音によるコミュニケーションと言えるだろう。

対話をすることで相手との共感が生まれ，人に自身の思いを伝えることができた嬉しさを感じる。また，メンバーが伝達した拍が自身のところに戻ってくるのを集中しながら待ち，次の自身の行動を予測する行為は，次の行動への期待感をいだかせ，いわゆるワクワク感を生じさせ，それが楽しさを大きくしてくれる。同時に，強く･弱く，速く･遅くと変化させる表現方法をとることで，音楽を形づくる要素を体得しながら音楽を学んでいる。

４　自己表現力を育てる

前節で述べた音を伝え合う活動により，リズムや拍を音楽的に感じ取るスキルを獲得し，人との関わりの中で自己を表現することを学ぶことができる。最初に１拍目は手拍子，２拍目は隣の人へ伝えるという行動を「知る」ことからはじまり，次にそれを自身が「経験」しながら，他者の

反応を受け入れる。そして，その実践の目的やさまざまな表現を「理解」し適応しながら，それを「自己表現」している。「把握」から「自己表現」する過程で，音の強弱・高低･長短などの音楽を特徴付ける要素を体験的に表現し，さらに，歌詞やメロディなどに対するイメージをふくらませ，どう表現したらよいのかという「探究」を行うことで自らの意図をもった表現活動となり，それにより表現する能力を広げていくことができる。

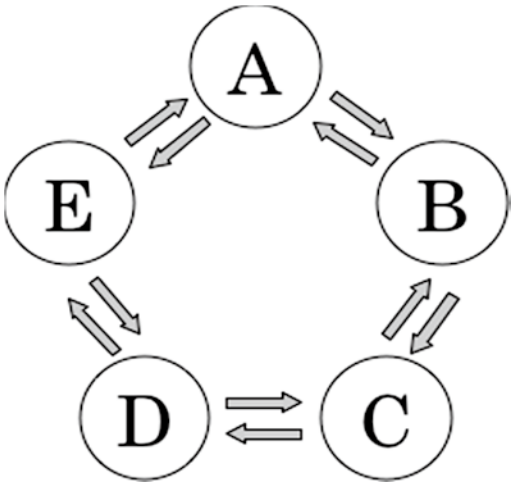
「七夕さま」と「さくらさくら」を例として説明する。「さくらさくら」はゆったりしたテンポで，「七夕さま」もそれほど速いテンポではない。テンポの速い遅いを感じる尺度は個人の脈拍数に影響され，脈拍数を目安に速く感じたり遅く感じたりしている。子どもたち向けの曲や好みの曲のテンポが速いのはそのためでもある。概して速いテンポの軽快な曲になじんできたものにとって，ゆったりしたテンポの曲に面白さを感じにくく，場合によっては退屈になることもある。

「さくらさくら」は小学校の歌唱共通教材で，第４学年で必ず歌う教材である。「七夕さま」は季節を感じ取り伝統文化にふれるために非常によく使われている教材である。これらを歌うとき，子どもたちはメロディや歌詞を知り，それを歌う経験を重ねることで，それぞれの曲に適応することはできるだろう。それも表現力の育ちといえるであろうが，子どもたちがその曲をそれぞれの感じ方で表現しようと探求するプロセスがより重要な要素となる。音楽を楽しむには，イメージに裏付けられ，そこに感情移入ができている自己表現が必要である。

「さくらさくら」では，春の初めにきれいに咲いた桜の花をそれが風に舞い散る様子などを，実物や映像などからイメージし，ゆったりしたテンポでの歌唱表現をめざすことが必要である。さらに，ゆったりしたテンポの表現に必要なのは，曲や歌詞のイメージに対する共感と曲が終わるまでそのイメージを持ちながら表現できる持続力や集中力である。歌唱に前節の音を伝える活動を組み合わせることで，表現しようとする意図をもち，持続や集中が容易に，そして楽しみながらできる。

拍を感じ取る実践を繰り返し楽しむことで，子どもたちはその活動に対して，経験を積み，適応し，それを記憶して習得していく。そこには他者と対話しながら共感して表現したという喜びが当然含まれている。そういう体験と「さくらさくら」を歌う活動を同時に行う。歌詞や曲に対するイメージを子どもたちに持ってもらい，ゆったりしたテンポを維持するため，隣の人の手をたたく動作を曲線的にゆっくりとできるよう隣との距離を少しおき，拍を伝えながらこの曲を歌ってみる。

そのとき，桜の花の可憐な花びらやそれが一片舞い落ちる様子などをイメージしてもらうと，隣の人への拍の伝達もやさしくできるはずである。そのイメージができていれば，隣の人の手をたたく動作も曲線的に柔らかなものになるだろう。桜の花の描写には咲き乱れる様だけでなく，強い風に舞い落ちる花びらの様子もある。それを表現するには，隣との距離を縮め，速いテンポで歌いながら隣へと拍をリレーする。ただ，テンポが速くなっても，桜の花びら一片は小さく軽いものであるため，優しく隣の人の手をたたくことで，風任せに舞い落ちる桜の様子を表現してもらう。



（村山,2012）

Ⓐ～Ⓔ　子ども

⇒　音を伝える方向

※伝達する方向は各人にゆだねられる

図２　音による表現の伝達

図２は，一定方向への音のリレーを，対話をもたらす双方向の情報伝達にし，音による対話とその表現を実現できる音楽づくりの実践のひとつである。右方向に音をリレーして伝達するだけでなく，誰でもその伝達方向を決定できるため，それをメンバーが受け入れたことでそのグループへの帰属感を感じ取り，さらに個の表現をも受け入れる音を介した対話となる。

これを速いテンポの歌い方に取り入れることで，風にあおられ右左に揺れながら舞い落ちる花びらを体験的に表現できる。テンポが速くなると，伝達方法が変わったとき素

早く対応できなくてテンポに遅れが出たり，強く叩きすぎたりする反応の乱れもあるだろう。しかし，子どもがその表現にチャレンジしようとする思いや，速い動作で混乱するのは当然というグループ内の他者からの容認，他者も同じように混乱を見せているなどのことから，できなかったと落ち込んでしまうような失敗とはならない。それはグループのメンバーといっしょに笑っていられる楽しい失敗となり，他者から認められた自己表現に喜びと楽しさが加わる。

速いテンポの後，再度，隣との距離をおき，ゆったりした動作で桜の美しく咲く様子をイメージしながらこの曲を歌ってみる。そのときには,“なめらかに音をつなげて歌って”という指示は不要になるだろう。実際に表現されている歌声は，完全なレガート（legato，なめらかに音をつなげる）にはならないかもしれない。レガートな歌い方とそれを表現できるスキルの獲得には時間がかかる。しかし，優雅にゆったりと桜の咲き乱れるさまをイメージして，身体でもそれを表現しながら歌うとき，単に歌唱表現のスキル(レガートで歌う)を指示したときより明確な意図をもった表現になるだろう。その表現の後で，たとえば“なめらかに音をつなげて歌っていて，桜が美しく咲いているきれいな景色が想像できた”と評価することで，その表現に必要な音楽表現スキルを確認でき，次の意図を持った表現の体験につなげていくことができる。

「七夕さま」でも同様な方法でイメージをもって表現することができる。織姫が身にまとっているような羽衣や心地よいそよ風に揺れる笹の葉を想像し，それに拍を伝える動作も加えることで，この曲の歌詞が表している世界をそれぞれの感性で捉えて表現できる。子どもたちがこの曲にどんな感情移入をするかは，それぞれの経験や体験の差から変わってくるだろう。経験や体験の少なさは，視覚的情報でイメージにより補足する支援を準備する必要があるだろう。羽衣が風もないのにたなびいているような様子を柔らかい布を大きく動かすことで，また，羽を高い位置から落とし，ふわふわと空気の流れにのって降りてくる様子を見ることで，具体的なイメージを持ちやすくなるだろう。それがイメージや意図を表現へとつながる。

この曲でも速いテンポでの歌唱を取り入れていく。速いテンポと遅いテンポでの相対する表現を経験することで，どちらのテンポに対してもイメージづくりとその表現に伴う感情移入を体験でき，それぞれをより明確に確認できるからである。速いテンポのときの織姫の衣装や行動，あるいはなぜ笹の葉が大きく揺れたのか想像することなどを，表現する子ども自身にも探求してもらうことで表現に対する興味と意欲を持つことができ，満足できる自己表現へと導いてくれるだろう。速いテンポから遅いテンポの表現に戻る場合も，再度，イメージを想像してもらい，柔らかく拍を伝える動きを２小節分，または４小節分続けてもらってから歌い始めることで，曲への感情移入がしやすくなるだろう。

また，拍を伝える方向を任意に変更する（図２）ことを展開させ，方向を変更するタイミングを１フレーズが終了した時点にすることで，音楽を特徴付けている要素を体験的に学ぶことができる。フレーズは曲を構成する単位であり，それを聴き取る能力を育てることで音楽の基礎的能力を獲得すると同時に，その獲得した能力は次の表現に生かされてくるだろう。

５　おわりに

音を伝える活動を一つの例として，音楽における自己表現とその能力の獲得について述べてきた。自己表現は，その表現を受け止める相手とそこからの反応という双方向の関係の中で，獲得したスキルを使い，意図を持って表現することであるといえる。

ここでいう音楽的スキルは，歌唱や楽器演奏のように直接的に音楽表現にかかわる個人的能力だけを指しているのではない。音楽表現スキルの獲得を前提としていないボディパーカッションやドラムサークルを応用したリズム活動や音楽づくりからも，小学校学習指導要領（音楽）で示されている共通事項にあるような音楽を特徴付けている要素について理解し,それを表現できるスキルを獲得できる。特別な演奏技術は必要とされていないが，個人としては自己表現の楽しさを，集団としてはコミュニケーション力や共同体への帰属感を獲得でき，音楽表現の楽しさを体験しながら音楽を理解することも，音楽表現に必要なスキルと考えている。

歌唱，器楽演奏という音楽的表現には，読譜能力や音程をコントロールする能力，楽器の演奏技術などのスキルが必要であるが，同時に再現するための音楽内容についての理解とその表現体験を欠くことはできない。みんなで音楽することでその楽しさはいっそう大きくなるという表現の中に，個を集団の中に埋没させ，一律に他と同じ表現をすることは含有されていない。

音楽における自己表現とは，その表現に必要な音楽的スキルの獲得を前提として，作詞者や作曲者が表そうとした音楽的内容を，それぞれの意図をもって再現することである。そして，音や音楽による相互の対話が行われることで得られる帰属感を根底にして，自己表現を受け止めてもら

えた自己肯定感，音楽的内容をどのように表現するか探求すること，自己表現できた達成感や満足感と次の表現への意欲が音楽する楽しさを生み自己表現力を育んでくれると考えている。

参考文献

山田俊之『楽しいボディパーカッション①』，音楽之友社，2003年

アーサー・ハル著，佐々木薫・速水葉子・増永紅実訳『ドラムサークル・スピリット』，エー・ティ・エヌ，2004年

アンソニー・ストー著，佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳『音楽する精神』，勁草書房，1990年

小川博司『音楽する社会』，教育芸術社，2011年

竹田契一，里見恵子編著『子どもと豊かなコミュニケーションを築く　インリアル・アプローチ』，日本文化科学社，2010年

村山ひろみ「対話による音楽表現が生む伝える楽しさ」『福山市立大学研究紀要Vol.1』p.100，2012年

ジョン・ビーン，アメリア・オールドフィールド著，よしだじゅんこ訳『こころとからだを育む音楽ゲーム』，音楽之友社，2003年

柴田礼子『子どものためのたのしい音遊び　伝え合い，表現する力を育む』，音楽之友社，2009年

ドロシー・T．マクドナルド＆ジェーン・M．サイモンズ共著，神原雅之・南場正明・里村生英・渡邊均・吉長早苗共訳『音楽的成長と発達－誕生から６歳まで－』，溪水社，2003年

ハンガリー国立教育研究所編著，コダーイ芸術教育研究所訳『ハンガリー保育園における美的教育』，明治図書出版株式会社，1972年

福井昭史『音楽科授業指導と評価－評価が変わると授業も変わる』，音楽之友社，2004年

本研究は2013年11月に福山市立大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認された

（2013年11月18日受稿，2013年12月３日受理）